

昭和五十二年七月二十三日  
第三種郵便物認可  
発行(毎月一回・十五日発行)

(通第三四二号)

# 慈

# 光

第二十九卷

第十二号

## 目 次

いのちの初夜抄……………北条民雄……………(24)	世間虚仮・唯仏是真……………花田正夫……………(20)	念仏詩抄……………木村無相……………(17)	近角先生の御一生……………福島政雄……………(4)	信仰所感……………近角常観……………(1)
---------------------------	-----------------------------	------------------------	---------------------------	-----------------------



# 信仰所

## 感

### 近角常觀

今さら改めて申すまでもないことながら、親鸞聖人の信仰は如何にも徹底的のものであって、人生百般のことこの信仰の徹底に待たねば解決が出来ないのであります。それなのに今日一般に聖人の信仰を直ちに獲得する者が少くてその教化を一種の型の如く伝統的に繰返す者が多い、これは最も遺憾にたえぬ事である。

我等は聖人の信仰の生命を体験して、人生百般の事を解決せんと試みるものである。それにもかかわらず誌上にその真面目を發揮することが甚だ困難である。これは久しい間熟考したる問題である。されど、結局は各人が信仰を獲得するよりほかに道はない。こいねがわくば同朋諸氏は、本誌（求道）を以て、伝統的に教義を反覆するものとなさずして、信仰を体験して人生百般の問題を徹底的に解決せられんことを、これ本誌の至願である。

信仰は生死流転の迷妄を断絶して、永劫涅槃の靈境を開覚するが根本問題であることは云うまでもない。しかし、

和ならしむる源泉であると云うのである。

同時に、政治に、経済に、かつまた文芸に、現代は種々の思想界の混乱を来してある。いわゆる軍国主義、民本主義の潮流の如きは世界を二分せんとする二大思想である。しかしこの両者は我等の信ずるところによれば徹底したるものでない。聖人の信仰は、上下の秩序整然にして、かつ上和らぎ下睦ぶところの平和な政治の実現出来ることを信ずるのである。聖徳太子の十七憲法の如きは實にその精神の躍如たるものである。これもまたつまりは信仰の徹底より自然にあらわれることは寸分疑いの余地はない。労働問題にせよ、家庭問題にせよ、みな必ず信仰によつてその解決の根本的基礎をなすものであると信ずるのである。かく云えばとて我等は各種の専門的知識をよく知つていのではないが、その根本の動力が信仰であるということ断言するものである。しかもその信仰は頑固の様であるが、仏教の信仰であることを断言する。而して親鸞聖人の信仰は一文不通の者も、宏才明達の人もひとしくこの境界に悟入し得られるべきものであることは、毫も疑いを容れぬ。

これらの所感は講壇に誌上に切言せざるを得ぬものである。ただ思うように云いあらわすことの出来ぬのが遺憾に

この信仰を獲得すれば、この人生においてその光輝を放たさしめることは必然の結果である。

そうであるから、数年来の欧州の動乱、否世界の動乱の問題も、最後の平和の源泉は信仰に待たなければならぬ次第である。而して我等の所信を素直に申せば、欧米の宗教は、或は残害、殺戮、迭相（てつそう）、吞噬（どんぜい）の修羅場を徹底的に融和せしめるの根本精神が欠けている。この点では仏教は正に根本精神を發揚すべき秋であると信ずるのである。

親鸞聖人の信仰は實にこの際において最も容易にその円融無碍の力を人生に実現するものである。このことは信仰を体験した人 冷暖自知するところであって、これを自ら証し自ら得て、もって世界に發揚すべきである。しかし、こう言うのは、この闘争堅固の季（ぎょうき）末世をしの、清浄の安樂世界にするという空想を説くのではない。むしろ末世相應の要法、濁悪世界の光明として、たしかに流転輪廻の根本を断絶し、千才（かんか）動乱の闘争を平

思うのである。

しかしこれは言うべき事柄ではない、まず如来の慈悲の下に、自覚自得すべきものである。我等はむしろその自覚自得のむつかしいことを慚愧し、云うはやすくして、行のむつかしきことを懺悔するの外はない。

#### 御正忌に憶う

秋老い、天寒うしてまた御正忌の季節とはなりぬ。寺々に声高うして、はるかにひびく勤行は、聖人が胸底よりあふれ出でたる正信偈和讃なるとおもえば、何ぞ聖人の遺徳それ広大なる。

如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし  
師主知識の恩徳も 骨を砕きても謝すべし

居多が濱の畔に低徊したまひ、鳥屋野に庵を結びたまえる聖人流罪の光景、宛として眼前に髣髴たり。

まことにこれ面のあたり五劫思惟を実現せしめ、永劫修行を縮写したまう。聖人の常の御述懐、歴々として吾人の耳にひびき来る。親鸞一人がためなりけり、の一言は、實に十方衆生のためなりけり。

噫、何等の幸かこの如き德音に接するを得たる、あに遠く宿縁を慶ばざるべけんや。



求道得信には「吉水入室」を感じ、家庭生活には「六角靈告」を想い、行路艱難には「北越流罪」を偲び、伝道讃歌には「稲田草庵」を慕う。

人みなその境遇と年齢とに従いて、そぞろに聖人の御跡を追いたてまつるを得べし。

吾人は「箱根の晩陰」、「掃落移住」とを追想したてまつる毎に、聖人が諄々として倦みたまわず、老の至るを忘れて、嶮岨を越え、東西に流離して、唯々末代の我等を哀憐授けたまいて、如來二種の廻向を十方に等しく弘めんとの矜哀の御心、感泣したてまつるに余りあり。

而して聖人、弘長二年の末頃より、いささか不例の気まします。夫より以来口に世事を交えず、唯仏恩の深きことを述べ。声に余事を現わさず、専ら称名絶ゆることなし。而して第八日午時、頭北面西右脇に伏し給いて、遂に念仏の息絶えまし終んぬ。御年九十に満ちたまう。噫これ我等遺弟慟哭して、追慕措くあたわざる所。されど聖人は明らかに極楽の蓮台にて一味の衆中を待ち受け給う。噫慕わしきかな、聖人の御跡、噫慕しきかな西方寂靜無為の浄土。

古は稀なりしてふ歳に入りいつの日までのいのちかとおもふ

善根をたちたる身ゆゑ善業を積まんとすれど空しかりけり

善根をたちにし子ぞとみそなはしみ親はわれに添ひて離れず

善根をたちにし身ぞと知らずして久しくわれは迷ひこしかな

げわい

みほとけのみちかひきけばひとのよのこころしき山もこゆるたのしみ

弥陀仏の御名称えつつひとひとひ、けふを吉き日といそしみまつらん

### 近角常観先生の御一生

#### 一、大煩悶御入信まで

明治時代の親鸞聖人と仰いでいる人もありました、近角常観先生が浄土に還帰遊ばされてから、もはや三十余年の月日は過ぎ去りました。先生御存生の往時を思えば、様々の追憶や感慨が胸を流れます。ここに先生の御一生を追憶申し上げ、花田正夫さんから戴いた資料を主として些か及ばぬ筆を進めて見たいとおもいます。

(幼少時代)

先生は明治三年、滋賀県東浅井郡朝日村字延勝寺という所の西源寺というお寺で誕生遊ばされました。檀家わずかに二十七軒という小さなお寺で大谷派の末寺であります。御幼少の時、筆と紙とあれば、それで熱心に遊ばれ、他の玩具はお用いにならなかったというので、特別の御性質であったことが察せられます。或る時お友達のをいたずらな子供に着物を汚されて帰られた時、厳父のお叱りを受けられました。この事が先生の将来に非常な影響を及ぼしたと

#### 福 島 政 雄

承っています。正しい事のためには、どんなに苦しくてもこれを主張せねばならぬという精神を養われたと、先生は云っておいでになります。お父様は此の事をはじめとして先生の精神に深い感化を与えたお方でありました。

先生八才の時お父様からはじめて姥捨山のお話をお聴ききになつたということですが、これが先生の心に深い感銘を与えて、後年先生御入信のあとでは、一生涯信仰上の御講話のときには、必ず姥捨山の話を繰返してお話しになりました。それが聴く人に深い感動を与えたのであります。

明治十五年、十二歳の御時、三経の訓読を習われました。これも厳父の御導きであつたと察せられます。十六年には令弟常音先生がお生れになりました。常音先生は後に御兄上常観先生の伝道の上に無二の御手助けをなされた方でありました。その後先生は京都で三年間宗学の勉強をなされました。それより本山から内地遊学を命ぜられ、東京に移されましたが、自重なされて高等中学の入学を一年おく



れて勉強なされました。

#### 青年時代

明治二十四五年の頃、東京高等中学（第一高等学校の前身）に御在学の時代に、松島において仏教夏期講習会を御開催になりました。また帝都仏教学生青年会を提唱なされ、日本全国の学生仏青の端を開かれました。花祭の行事や親鸞聖人の降誕会も先生が卒先して始められたのであります。実行活躍の先生の真面目がここに鮮かにあらわれて来ました。

#### 白川黨事件

明治二十九年には白川黨事件であります。これは清沢満之先生を中心として財物と権勢欲とに濁っていた宗教界の革新運動が展開せられたのであります。此の運動は明治三十年に及んだのであります。此の時は清沢先生に従って大に理想主義が発揮せられた常観先生の面目が躍如としていたのであります。

#### 大煩悶

清沢先生の理想主義に感激して活躍された常観先生に、その理想主義が行きつまる時が来ました。それは明治三十年の四月でありまして大煩悶におち入れられたのであります。それは実に春から秋まで続いた大煩悶でありまして、その有様は先生の懺悔録に委しく述べられてありますので

ここでは述べないことにいたします。

#### 信仰の自覚

大煩悶のあとで先生は御自分を深く反省なされて信仰の自覚に入られました。つくづくと考えて大に自分の心にかかって来たと言つて居られます。永い間先生は真の朋友を求めて居られましたが、その理想の朋友こそ佛陀であるということに自覚されたのであります。歎異抄に「廻心ということただ一たびあるべし」とある、その廻心を先生はここに体験せられたのであります。

#### 二、外遊御帰朝まで

#### お友達

朋友ということについては先生は実に深い感銘を持っておいでになりましたが、実際先生は優れたよいお友達を持っておいでになりました。信仰の上の莫逆のお友達ともいふべき池山栄吉先生のことには後に申し述べることになりましようが、東京帝國大学哲学科三年時代からの同窓のお友達としては、下村宏、吉田静致、常盤大定、境野黄洋、杉村楚人冠などの方々がいました。何れもそれぞれの方面において精神的に大に活躍なされた方でありまして。

#### 修身教授

帝國大学卒業後、先生は真宗大学で英語と修身とを教え

られました。当時修身は将来の信仰問題の基礎となるからと言って、原稿を作つて大切に教えられたということがあります。これは御令弟から承つたことでもあります。此の一事も先生の真面目をよくあらわしていると思つたのであります。信仰は道徳問題に行きつまって開けるといふ先生の体験から出た御事でありまして。

#### 巢鴨刑務所

それから巢鴨の刑務所に教誨に行かれるようになってからの事と思われませんが、刑務所長がキリスト教を以て教誨しようとした時に先生は断乎としてこれに反対せられ、仏教による教誨を以て徹底せられました。これは先生の信念の確乎たることを物語るものであります。徹底的な絶対他力教すなわち浄土教でなければ徹底的救済ということは到底出来ないという大信念の下に行われたことであります。実に先生は刑務所の受刑者に対して深い同情を持たれたばかりでなく、満天下の同胞が仏陀の救済を離れて生活している有様を心から気の毒に思われ、御著「信仰の餘瀝」の中に於いて次のようなことを述べておいでになります。

「巢鴨三千の囚徒が法縁を絶たれたと聞かれたる時は、苟くも信仰の経験のある人はそぞろに心を動かされたるならん、況して現今満天下の同胞は、信界における監獄に監禁せられて、三宝の慈悲に離れているのを見て同情の涙を

そそがずには居られまい、一日も早く我同胞を光明ある世界に救い出さねばならぬ。」

#### 宗教法案

明治三十二年から三十三年にかけて宗教法案問題がおこりました時、句仏師を中心として近角常観先生、池山栄吉先生のお二人が大活躍をなされ、遂に法案の撤回に成功せられました。これは非常に重大な事でありまして、仏教の地歩を自由の空気の中において確実に保つ上には是非必要なことであります。

#### 西洋留学

此の法案問題成功の功によつて近角・池山両先生は東本願寺から西洋に留学を命ぜられ、句仏師も渡欧なされました。明治三十三年四月のことです。四月十三日横浜を出発なされ、二十五日バンクーバー着、三十日にシカゴ市に着、なされました。此の間太平洋の鯨波、ロッキーマの積雪、茫々たる曠原など、天然の大觀を送迎なされて、急にアメリカの二十層の家屋が並び立つている街頭に立たれたのであります。それから池山先生と御一緒に視察をはじめられました。

#### アメリカ視察

シカゴからニューヨークに赴かれ、ニューヨークを中心にして南北二回の旅行をせられ、その間或は梵語の教授に



面談せられ、或は仏教信者を訪れ、キリスト教とその信仰の有様を審(つまひら)かに視察せられました。又キリスト教の社会事業をも視察せられました。そしてアメリカのキリスト教は社会的であると感ぜられました。

「教会を以て単に日曜日に於ける礼拝の場所と定めずして、その周囲には青年の寄宿舎、労働者の集会所、その他諸種の俱樂部を以て満たされ、日曜日に限らず、週日にてもしば／＼教会において集會を爲し、社会の改良及び窮民の保護をなし、又日曜日に教会に集會するについても、真面目なる信仰というよりも、社会的に此の場所によりて一種高尚なるたのしみを得るといふ傾向なり」と述べて居られます。

アメリカでは両先生共同の視察をなされましたが、ヨーロッパの視察は分担して視察しようということに御相談がまとまり、池山先生は直にドイツに行かれてベルリン大学に入って学問の方の研究をなされることになり、近角先生は先ず英国を視察し、夏に両先生はフランスで相會なさるということになりました。それで池山先生は五月十八日ドイツのブレーメンに向われ、近角先生は同二十三日アメリカを辞して英国のリバプールに向われました。

#### 英國にて

近角先生は五月三十一日ロンドンに御着きになりました。

ランス旧教に対する御感想は特に注目すべきものがあります。パリでは七月三十日から一週間、仏国聯合公私救恤會議に出席なされ、九月三十日から一週間、万国連合宗教歴史大会に出席せられました。フランスの旧教については僧または尼の組合、すなわちオルテンというものが旧教伝導の精兵であることに注意せられ、猛烈な手段を以て教域の拡張に勉めつつありと云われ、ゼンユイット、ドミニカン、フランシスカンの各派が盛んに社会事業に活躍し、國家社会上には危険な要素であるにもかかわらず、その勢力は益々盛んである有様を視察せられて、旧教が政治的關係を有して、ローマ法王の下に世界的権力を主張していることに対し、心を寒くして日本の仏教者の為に忠告しておいでになります。このフランスに於ける先生の深い御感慨が今後における先生のカトリックに対する御態度を決定するようになつたものと思われまふ。政治と宗教との結託が如何に害毒を及ぼすものであるかを痛感なされているのであります。

#### 南独旅行

パリでは池山先生と会せられ、九月十八日から御同道で南独旅行の途に上られました。ドイツ連邦には新教國があり、旧教國がありますので、ストラスブルヒでは旧教徒が多いけれども、新旧両教互に相争う有様を視察せられ、ウ

た。「旧友吉田静致君と同宿す」と書いておられます。ロンドン御滞留凡そ二ヶ月、居然として城のような英国教会の制度に驚き、百般の教派が皆備つていて、千宗万派雜然として交るロンドンに於いて、一々その教会を訪い、出来る限りその性質組織を研究せられました。宗教的問題は常に火花を散らして戦つていと云つておいでになります。

しかも英国監督教は苟くもアングロ・サクソン勢力のあらん限り、千古変ることがないであろうと感想を書いておられます。なおロンドン御滞在中、北の方ヨーク、南の方カスターベリーにも遊ばれ、その伽藍を訪ねられました。またイートン、ハーローの学校、ケンブリッジ、オックスフォードなどの大学を訪ねられました。

オックスフォードにマックスミューラー博士を訪われたのは七月六日であつたということでありまふ。博士は有名な東方聖典 (Sacred Books of the East) の翻訳者であります。先生と會談一時間、懇ろに日本仏教に新鮮な光明を与えるようにと誨(おし)えられたということでありまふ。しかもその十月下旬、博士は七十七才で世を去られたので、先生は無限の感慨を寄せておいでになります。

#### フランスと旧教

七月二十五日、「吉田君と共にドーバーより海峡を渡り、仏国カレーに向う」と書いておられますが、先生のフ

エルテンベルヒでは最も盛んな新教國として、日曜日の會堂殆んど空席のない有様を見て、そぞろに宗教改革の當時を追想なされています。一週間の伝道會議にも列席せられ、様々の社会的施設をも見学せられました。次にミュンヘンでは旧教の方面の施設、殊にその教育教化の巧みなことに感ぜられています。

#### オーストリー、ハンガリーへ

それからオーストリアとハンガリーとの御視察では、オーストリアに秋風落日の感を催され、ハンガリーではその反対に民族の勃興を感じておいでになります。ハンガリーはヨーロッパに於ける唯一の東洋人種の國であることに深い感慨を寄せられています。それにつけても日本國民が奮発して文化を進めることを切に希望なされています。

#### ベルリンにて

明治三十三年十二月二日にはベルリンから日本國の御両親様にお手紙を書いて居られますが、日本國をおもひ殊に御両親をはるかに思わせられる心情が溢れています。「母上の御料理江州の菜漬など大に想い出され候」と書かれて、日本食をしきりに恋しがつておいでになります。

三十四年の四月八日にはベルリンに於いて祝尊降誕會の花祭をはじめ行われています。これは最初は池山先生、吉田、姉崎、巖谷の諸氏と御相談遊ばされて行われたそう



であります。当日は多くのドイツ人来会し、長岡外史氏の挨拶をプロスト氏というのが独訳し、次いで姉崎正治氏は花祭の歴史についてドイツ語で講演せられ、巖谷季雄氏もドイツ語で自作の詩のお伽噺を読まれたということで、この花祭はドイツ人に非常に善い印象を与えたということがあります。なお藤代氏も流暢なドイツ語で講演を行なわれています。而して先生は此の花祭のことを四月十五日にオランダのアムステルダムで書かれた手紙で真岡氏に報道しておいでになります。

また英國へ

その五月には先生は再び英國に遊ばれ、詩人ミルトンの隠れ家を訪れ、クエーカー教徒ウィリアム・ベンの食堂を訪い、英國の新教への感慨を寄せ、その真摯(しんし)の敬虔、実行的であって熱誠火の如く、堅実石の如き点に深く感じておいでになります。英國の國立教会は他の宗派のはたらきに刺激せられてその血液を清浄たらしめられて見えておいでになります。

ドイツにて

此の他、先生はドイツにおいては既に三十三年の秋にマルチン・ルーテルの遺跡を訪れてその宗教改革に深い感慨を寄せ、なおゲーテ、シラー、フランケなどの遺跡をもまわられ、チューリンゲンの秋の景色をも眺めておいでにな

ります。

感慨無量

かようにして先生は殆んど二年の星霜を西洋においてお過ごしになりましたが、明治三十五年二月四日、本山からの電報を受けて御帰朝なされることになりました。その時のことを先生は次のように書いておいでになります。

「西歴一千九百二年二月四日早曉四時夢寤(さ)む。突然として父母の慈訓を回憶し、飄って一昨春已降西洋の経過を追憶し感慨止むべからざるものあり、及ち鹽嗽(かんそう)謹みて大経を拝誦す。且つ以爲(おもえらく)此の如き深遠微妙の念を起したることなし。今にして筆を執りて其感を描かずんば亦何の時か其の期なからんと。而して時正に登校時間に迫る。乃ち校に登りて帰り忽ち帰朝を促すの電報に接す。廻顧せば米、英、仏、独、澳、匈、和蘭、白耳義、諸國の諸教を視察して、人事匆々の間二星霜を経たり。今や思想円熟して益々佳境に入るの時、此報に接す。因縁洵に不可思議也と。西遊二歳今独都伯林を去りて、羅馬の旧都を一瞥し、將に東歸の途に上らんとするの前夜(二月十一日夜)諸親友、予を助けて行装を整え帰りし後、孤燈影下俯仰(ふぎよう)感慨に堪えず、座側小照をとりて感を記し教友諸兄に呈す。

独乙帝國伯林市に於て

近角常観」

## 二年の回想

西洋の御生活殆んど二ヶ年その間に先生は西洋の社会とキリスト教会の諸施設を御覧になって、その社会的活動の盛んなことに感ぜられたのでありますが、それと相伴って仏典殊に大無量寿経を非常の感激を以てお読みかえし遊ばされ、生きた宗教としての仏典の味わいを深く感じておいでになります。先生が御嚴父に対する至孝の御心持はその一生を一貫してあるのでありますが、西洋の御生活の最初に於いても終り方に於いても、御嚴父の親心に対して何とも云えぬ感慨を持っておいでになりました。

「親の言われたる通り、かく万里海外に於けることになつてあるかと考えたら、親の慈悲やら、仏のお恵みやら胸に塞がって感涙に咽び、とても横臥している訳にゆかず、早速床より出でて口を嗽ぎ、顔を洗い、満心の感謝を以て大経を訓読しはじめた」

これが先生の至心(ししん)のお言葉であります。

一方に於いて池山先生との御友情も終始一貫して誠に御美しきものがありました。明治三十四年十月三日御二人でイエナの宿で御書きになったお手紙には次のようなことが書かれてあります。

「拝啓、此度淨様エーナに御留学に就き同行致し、当宿に宿し申し候。是ルーテルがケットラー、ロイチナー、両

人に遇いたる宿に候。其室にて朝の珈琲を飲みつっ

ツム・シュワルツェン・ペーレンにて 常観

ビスマルクもここに宿したること有之候 栄吉」  
お二人の先生はかように西洋の生活を共にせられ、やがて御帰朝になってそれぞれの方面に御活躍になったのでありますが、唯お念仏一つという点において水遠にひびき合つておいでになるのであります。

## 三、信仰、求道、御示寂

近角先生が西洋からお帰りになつた明治三十五年は、先生は数え年三十三才の御時でありました。それから四十ヶ年間は先生の信仰上大活動をなされた時代であります。此の間の御活動を一々年月をしらべて述べることはむづかしいことでありますから、今は此の間における御活躍の最も注目すべき点を迷へることに致します。

親心の感激

明治三十五年三月二十四日に先生は長崎の港に御帰着になりましてその旨を御両親に電報でお知らせになりました。「故郷では父と母と電報をとり合ひをして諸根悦豫で身体中が嬉しいと言われた。それを聞いて我が身ながらその不孝を自覚した」と先生は後に述べておいでになります



が、御親子の御胸中何とも云われぬ尊くありがたい事を感じられるのであります。

#### 政治と宗教

本山から急に先生を呼び返されたことには仔細があったのであります。当時僧侶も代議士になることを許されたので、本山では先生をその候補にあげられたのであります。然るに先生は前にも述べました通り西洋の宗教を御視察中に宗教が政治と結託して政治を利用することは宗教としての墮落であると感じられ、殊にカトリック教会の動きについて深刻にその弊を痛感せられたのでありますから、断然代議士候補を御辞退になり、唯一筋に信仰を説く生活をお始めになりました。求道学舎はその為に創設せられたのであります。先生が辞退せられたのでその代りに出られたのが安藤正純氏であります。

抑々先生は政治という方面から見たならば如何なるお方であったかと言えば、政治的天分をお持ちになって政治的眼光の最も鋭い御方であったと思われれます。その先生が政治界に出ることを辞退なされて一筋に信仰を説かれるようになったということは、明治、大正、昭和の仏教の信仰界の為に実に慶賀すべきことであつたのであります。政治界に及ぼさるべき十分の力が転じて信仰界に向けられたのでありますから、それは信仰界に於ける偉大なる力として発

揮せられたのであります。

#### 佛教のあり方

当時先生は教國主義や政教主義が共に不可であるということ論及せられました。宗教家が政治を利用することも誤りであると共に、政治家が宗教を利用することも誤りであるという旨を痛感しておいでになり、これは先生の一生を貫いた持論でありました。英國の國教主義をも不可とし、カトリックが政治的に発展していることは最も誤れるものであるという御考であります。それ故日本の國家が仏教を國教とすることにも勿論反対せられます。日本の國は信教の自由の下にただ何となく仏教の國であるというやうなのが宜しいと云っておいでになりました。それでローマ法王と我が國と使節の交換をすることに絶対反対の御意見を観破して居られたのであります。それで使節交換問題が實際化しようとした時は死力を盡してこれを阻止（そし）せられたのであります。

#### 勅使のおたとえ

求道学舎を中心とする先生の世界は政治を超越した世界でありました。しかも日本國の生命の潤（うるお）いとなるということは先生の衷心の御念願でありました。先生の御講話の中には始終勅使御差遣のおたとえが出ました。た

とえば風水害や地震のために窮乏のどん底におち入っている人民がある時に、陛下は御慰問の勅使をお遣わしになる。普通の時であるならば勅使をお迎えするのに礼儀を尽さねばならぬが、今は災害に遇つて礼儀はおろか、キチンとした服装で勅使をお迎えすることも出来ない。併し陛下の大御心では、人民がそのようなやぶれかぶれの有様になっているのをしんからあわれに思召して、御慰問の勅使を下され且つ御救恤のお金をさえ賜るので、人民としてはその大御心を身にうけてありのまままで有り難く勅使をお迎えするより外はない。仏陀のお慈悲もその通りである。罪業深重、煩惱熾盛のどん底に沈んでいる我々衆生の有様を徹底的にお見とおしになって、それをあわれと思召し、あくまでも見捨てないとお仰せられるのであるから、我々はそれのお見捨てないお慈悲を我が身に受けて、そのまま有り難くお念仏申すのであると先生はよくお説き下されました。この先生の御信仰の中心には日本國の生命が躍如として、そこに久遠の仏陀の御まことが貫かれてあつたのであります。

#### 求道学舎

求道学舎の求道という名は大無量寿經から出たのであります。まして、「たとえ大海の如きも、一人升量して、劫數を経歴せば尚底を窮（きわ）めて、其の妙宝を得べし。人至心

有りて精進に道を求めて止まずんば、かならず當に尅果（こくか）すべし、何の願か得ざらん」というところからつけられた名であります。此の經文のとおり、先生は非常な決心と熱とを以て親鸞聖人の御教をお説きになりました。求道学舎は東京本郷森川町にありまして最初は粗末な木造の寄宿舎でありました。その二室ほどを打ちぬいて、先生は毎日曜日午前に熱心な御法話をおつづけになりました。また九段 佛教俱樂部にも土曜日にお出かけになって御講話がありました。求道学舎は寄宿舎として主として帝國大学の学生を入れて、信仰上の御導きをなされました。帝大と向き合う位置にあつて帝大と張合つてやるのであるとお仰せられていました。併した帝大と張合つて御活動なされたのではありません。日本全國を相手として御活動になったのであります。全國に遊説なされたのであります。それも純粹の信仰上の御講話でありました。

#### 求道誌と会館

明治の終り方から大正年間にかけて先生の感化を受けた青年は数多くありました。それらの青年は先生によって信仰の眼を開かれ、それぞれの方面で活躍するようになりました。併し東都の青年ばかりではありません。先生は「求道」という雑誌を発刊せられ、全國に呼びかけていられたので、有力な実業家などで先生に傾倒（けいとう）す



る人々が次第に多くなりました。その人々の力で求道学会は改築せられ、鉄筋コンクリートの求道学会と求道会館が出来ました。この学会と会館とを中心として先生の感化はいよいよ広く及ぶようになったのであります。

#### 生きた聖教

先生の御法話の中心は大無量寿経、教行信証や欺異抄にありました。御法話はこれらのお聖教にひたりきってお話をなされますので、聴く人は先生の上に積尊や親鸞聖人をひたひたと感ずるのであります。また聖徳太子も先生の御上に生きておいでになりました。親鸞聖人の信仰に心の眼が開けたならば、その次には聖徳太子の十七条憲法が大切な問題となると先生は云われました。そこに信仰と日本国家の生命とが一流れになっている御心持がはっきりとわかるのであります。

#### 夏期求道会

明治から大正にかけての頃求道学会で毎年の夏に夏期求道会という集りを催されました。それは一週間ばかりの集りでありまして、大い教行信証の御講話を先生がなされ、また人生の実際問題と信仰の關係についてもお話があったのであります。此の夏期求道会の御講話は殊に熱のこもった懇切なお話でありました。大正三年の夏の求道会では信之巻の阿闍世王入信文についての御講話がありまし

#### 句佛師問題

大正天皇崩御の年には、先生は数え年五十七才におなり遊ばされていたのであります。此の時を境目として全国に信仰上の遊説をなされることは一旦おやめになりました。併しながら数年ならずして句仏上人問題が起ったのであります。先生は決然として大谷派本願寺の改革のために立たれました。時は昭和四年でありました。それは本願寺が財政のために腐敗しきっているのを改革せねばならぬとこの御事でありましたが、同時に句仏上人の除籍問題を大問題として、子として親を裁くということは仏教の信仰上あるべからざる一大事であるとして、名分を正さんがために立たれたのであります。そのために先生はまた全国を遊説しておまわりになったのであります。六十歳を超えられた先生が全国をかけての御遊説でありましたので、それは非常の御苦勞でありましたが、先生は火のようになつて遊説旅行をおつづけになり、此の問題について非常に御苦心なされました。これが先生が病氣でお倒れになる第一の原因となつたのであります。

#### 脳溢血に

昭和六年 六十三才の秋、十一月三日に広島文理科大学の講堂で十七条憲法を中心として熱烈な御講話をなされ、それから福岡県の方におまわりになつて御帰東遊ばされた

たが、先生は御自身が阿闍世王であるという御心持でありまして、お話は一語一語聴く人の胸にとおるものがありました。親鸞聖人のお言葉「誠に知んぬ、悲しいかな愚禿鷹、愛欲の広海に沈没し、名利の大船に迷惑し云々」のところなど、先生は実は深くこれをお味わい遊ばされたのでありまして、聴く人は今更のように自分の罪業深重、煩惱熾盛の姿に目がさめるのであります。またその集りは各地方から集まられた熱心な求道者に充ち満ちていましたので、座談会の時など皆が感動するような告白がありました。

#### 死刑囚難波大助

先生が日本国の問題、個人の信仰の問題と相通する重大事としてお考えになったといふことの生きた例証としては大逆事件の死刑囚難波大助を御教化になったことを挙げねばなりません。先生は実に幾度も難波大助にお逢いになつて懇切に信仰のことをお説きになったのであります。それがどれほど此の死刑囚に徹したかはなお問題でありませんが、先生が後に広島においでになつて此の御経験をお話しになった時、実に真剣なお話振りでありまして、先生が如何ばかり心をいれて難波大助を御教誨になつたかを察し上げることが出来るのであります。また島田三郎をも同様に御教誨になつたのであります。

のであります。その後一ヶ月にして突然脳溢血でお倒れになつたのであります。先生を知る全日本の人々は驚愕してひたすら御回復を念じました。御静養の甲斐があつて、凡そ一ヶ年後には、御立ち歩きになる程度までご回復遊ばされましたけれども、右の御手はしびれて殆んどおかないにならず、これから後の先生は誠にお氣の毒でありました。先生が一筋に反対なされた宗教法案も議會を通過し、先生の御心配、日本国のための御痛心は深くなつたのであります。御健康は或る程度までの御回復に止り、求道会館にての御講話も、もはやむかしのお姿を見られぬようになりませんでした。

#### 二河白道の人生

満州事変が支那事変に転じて、御長男が南支に御出征になりました時、先生の御心配は更に加わりました。此の人生が二河白道そのものであるとの感じを深くなされました。二河白道の喩については、先生は以前から、これは比喩以上の比喩であると仰せられていましたが、今や御長男が戦陣の間に馳駆せられるようになって、水火相激する白道の人生といふことを先生は痛感なされたのであります。その御長男は昭和十三年十月一日に廬山の戦に於いて戦死なされました。これより後の先生は何とも云えぬ淋しい御心持で、いよいよ唯お念仏の生活を御つづけになりまし



た。会館で御講話のあとで、御自分の御心持を御打明け遊ばされて、歎異抄九章の心持であると仰せられました。先生は決して空元氣を出したりなさいませんでした。自然法爾（じねんほうに）の御心持で念仏唯一つの晩年を御越しになりました。併し句仏上人も御滞籍になり、此の点では先生も御満足になり、春は自然法爾の中に到り、乾坤（けんこん）の万物順行通ずと述べておいでになりました。

#### 示寂と戦争観

昭和十六年十二月三日、先生は求道学舎において御示寂（ごしじやく）遊ばされました。御発病以来満十年であります。その月の八日に大東亜戦争が始まったのでありますから、此の戦争は御存知なくて世を去りたもうたのであります。戦争に対する先生の御考えは、非戦主義ではありませんでした。時としては大に戦わねばならぬこともあると言っておいでになりました。併し勿論戦争主義ではありません。国と国との間にも国際的懺悔といふことがあるべきであると仰せられていました。

一たび仏陀の平等大悲の光を身に受けた以上は相互に敵視する代りに相互に感謝し、衆生恩を感じるののである。政党的軋轢（あつれき）も調和することが出来て、万国の平和も来すべきであり、閻浮（えんぶ）八万四千城、干戈た。色々の宗派や所謂新興宗教などもあります中に、併し何となく仏教的である日本国民は、今後においていよいよ先生の御精神によって心の眼を開かれて行かねばならぬとおもうのであります。

昭和四十七年四月二十八日

#### 追記

本稿は、京都の百華苑の企画で、明治百年の名師のシリーズのために、福島先生が近角先生の御一生を述べられたものでありますが、その発表される直前に、福村書店から「日本家庭史と教育」の原稿を急がれ、それに一年間かかられ、出来あがったところで倒れてしまわれましたので、本稿はそのままになっておりました。幸に、福島農婦夫人から御惠贈頂きましたので、近角先生の御忌の臘月、慈光誌へ頂くことにいたしました。

毎月近角先生のお言葉を頂いておりますが、先生のお人柄と御活動について、生涯の師としてお慕いになった福島先生からお聞き出来ますことは本当に嬉しくありがたいこととであります。謹しんで御禮申し上げます。

（花田記）

（かんか）を動かさずして太平を致すという古人の詩があるとおり、この地球上に大平和が実現せらるべきであると述べておいでになります。

#### 浄土の返照

今や尽十方の無碍の光明と一味にあらせられて、先生は如何に世界大戦後の日本国を御覧になつておられるのでありましようか。先生の令夫人は求道学舎の学生達から、観音様のように仰ぎ慕われたお方でありましたが、先生のおあとを追うて間もなく御往生遊ばされ、先生の令弟常音先生は終始一貫御兄上のお仕事の御内助を遊ばされ、先生御往生の後には求道会館の講話を引き継いでおいでになりましたが、御令弟も御往生遊ばされました。

お浄土は賑かになり、此の世は淋しくなりましたが、併しそのお浄土の返照（へんしょう）はあの赫々たる夕焼雲のように此の人生を照らされています。近角常観先生の此の世における七十余年の御一生は永遠の意義を持っています。全く無我の御心持で、親鸞聖人と御同様にただ弥陀の本願をお伝えになりますばかりの純一な四十年の御活動、強さがあり、熱があり、烈しさがあり、しかも久遠の静けさを心の底にお持ちになった先生は、いつまでも此の世の光となり力となって世を導いて下さるのであります。終戦後間もなく米国の指示によって宗教法案は撤去せられました。

#### 一 蓮院秀存語録

#### 歌 五 首

野山にてどこへゆくぞと人間はば

弥陀の浄土へゆくと言えよ

声しあらばあやうからしな火に水に

なかの細道見ゆも見えずも

そのままときくたび毎に涙かな

限りなき身をすてし呼び声

まけて行く人を弱しと思うなよ

智慧のちからの強きゆえなり

にくまれて憎みかえすと思ふなよ

にくみにくまれはてしなれば

#### 辞世に云く

今はとて何をかいわん南無阿弥陀

仏ははちすさきげてぞまつ



念 仏 詩

抄

木 村 無 相

そこへどう聞こえる

和上おおせに

// 吹聴(ふいちよう) 道具を

みな捨てて

心をハダカにしてみよ

ナニがのこる

地獄のタネばかり

手ブラ八貫

堕ちてゆくばかり――

そこへどう聞こえる//

和上|| 禿頭誠師

聞こえたもう

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

聞 く 一 つ

和上おおせに

// 四日市の文右エ門曰く

なんともなかったら

聞くのじゃ

ありがたかったら

聞くのじゃ

ありがたくなかったら

なお聞くのじゃ――//

聞く

聞く

聞く

聞く

聞く一つ

六字の仰せ

聞く一つ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

今 お 助 け

和上おおせに

// いよいよ

ただ今のお助けのこと

明らかなり

死んでから

墮つる地獄と

手のばすな

今のころを

今のお助け――//

今のころが地獄の業

今のころを

今 お助け

ナムアマミダブツと

今 お助け

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

無信の者に与え給えるなり



私にあっての「いのちの言葉」は、なんといっても「南無阿弥陀佛」のお名号であります。また、親鸞聖人『唯信鈔文意』の次ぎのお言葉なのであります。

「釈迦如来、よろずの善の中より名号を選びとりて、五濁悪時・悪世界・悪衆生・邪見・無信の者に与え給えるなりと知るべし」

※

私は斯の聖人のお言葉に出会った時、ハッと息を吞む思いがしたのであります。

そうしてその時、長年かかってようやくやくにして得た得たとしていた信心が、一瞬にして跡形も無く其の姿を消した



のであります。

そこにはただ、聖人仰せの「悪衆生・邪見・無信の者」、特に「全くの無信の者」の私を取り残されたのであります。

それと同時に思いもよらず、ユト佛法に関しては、微塵も疑う力も計らう力も無い、全くの無力・無能の私であることを、したたかに思い知らされたのであります。

こうした全くの無信・無能の私としましては、如来お与えのお名号を、お与えのままただ「南無阿弥陀佛」とおいただきするほかは無いです。

このような全くの無信・無能の者が、我が力をもって真実の信を得た得たと振りまわし、或は御本願を疑い計らうという事は、全くの我が身知らずの邪見・傲慢であります。

かかる邪見・傲慢の者には如来も、信を信として与えらるること無く、信を名号として与えらるるの外無いことでありましょうか。

昔、今の滋賀県——江州の長浜在に、妙忠尼という稀れな妙好人が居られたそうありますが、その妙忠尼が臨終前に、

「ワシは生涯、信心を得たい得たいと骨折りたが、如来様はお偉いお方で、この婆婆に信心をやると怪我すると

思われてか、トウトウ信心を下されずに、南無阿弥陀佛様を下されることにおくれた。」

と悦ばれたそうありますが、まことに聖人仰せの如くの私のような悪衆生・邪見・無信の者には、信を名号に籠めてお与え下さる外には助けようが無いことでありましょうか。

こうした私はそれ以来、お名号は勿論のこと、冒頭の聖人『唯信鈔文意』の「……無信の者に与え給えるなり」のお言葉を私の「いのちの言葉」として、またたく有難くいただいていることでもあります。

南無阿弥陀佛、南無阿弥陀佛。



## 世間虚仮・唯仏是真

花田正夫

聖徳太子が二十歳の時、日本最初の女帝推古天皇の摂政の太子になられたが、国の文化はおくれ、閥族が横暴を極め人々はよるべを失っていた。外は三韓の動乱が続き、外交は不安におちていた。

その時太子は、これを如何に処すべきかよりも、処すべきすべもない自身の開眼に志ざされ、幸に渡来の高僧、慧慈・慧僧を迎え、勝鬘・維摩・法華の三経の身読により、心眼が開かれると、冠位十二階を定めて人材の登用の道を開き、十七憲法を發布して国是を明示し、人々の自覚をうながし、文化の進んだ隨・唐への留学生を派遣し、大和の国の黎明がはじまったのである。

その間、太子を一番悩ませたのは、叔父君 崇俊天皇を殺害し、専横を極める蘇我馬子と政務を執られることの困難にあったと思う。相手を力によって亡きものにする道は、恨みから恨みを呼んでしてしのない闘争に終る。かといってそのまま放任したのでは横暴はつるばかりである。右も左も道の閉じた太子の行き詰りの心をひらき続け

たのは、世間虚仮・唯仏是真の一句であった。相對差別の五分五分根性から織りなす人間一切の是非善悪のはからのむなしさを知りつくされて、それを悲憫し給うて真実に転せしめて下さる善悪をこえた仏心のまこと一つであった。太子憲法の中に「夫れ三宝によりまづらば、何を以てか枉（まが）れるを直うせん」と太子御自身が讃仰されるところである。

親鸞聖人は「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」と仰言っているが、太子と時間も空間も超えてその軌を一にされているのも、同一仏心に帰された方々の当然の一致である。

世間虚仮

人間のはからいのむなしさについて、最近のハイジャック事件をとりあげてみよう。もとより詳細な問題を知る由もないが、ドイツは、民主主義の尊重から、律法的厳罰主義で対処し、日本は人道主義を掲げて、妥協的無抵抗主義



で処理した。又赤軍と称する者達は、自説を絶対として、これに従わぬ者は敵で、滅ぼしてしまえ式である。

これに対して、世界の各国は、夫々の立場にあってこれを批判し、諍否まぢまぢの音が巷間にみちている。当事者達は、法の厳守、生命の尊重、人類の自由、等々を高く掲げて、自己辯護を続けて、我れよしと云っている。

歴史はくりかえすというが、トルストイは絶対無抵抗主義による平和を説いたけれど、現実の生活では或程度まではよいにしても、限度をこえると破れて、抗争に終ることは論を待たない。唯特種な人、ソクラテスやキリストは、大いなるものの力に支えられてそれをたし遂げているが、一般大衆はそれを持たないから崩れる。

次に律法主義では、法による善悪の裁きとなり、その実行には力による対決、やがて法を異にする国とは戦うよりほかに道はなくなる。

更に、独善にもとずく暴力主義が種々な弊害をもたらしたことは、小さく家庭生活や、職場の仕事の上でも、その程度の差こそあれ自明のことである。まして暴力沙汰となると自滅の外はない。

以上により、律法主義による対立抗争、平和主義による妥協的無抵抗、或は独善主義の横暴等々、当事者は、これより外にない、自分は正しいと思っっているであろうが、世

間虚仮の域からは出られない、そこには光がない。

共に是れ凡夫のみ

太子憲法の十条に、我れよし、彼れあしと互に争うているが、省みれば、我れ必ずしも聖にあらず、彼れ必ずしも愚にあらず、共に是れ凡夫のみ、と教えられる。

この太子の仰せのうらに、太子が馬子に対して、苦しみ抜かれた挙句、仏によって与えられた一つの回答であった。相手を責めるだけでは、殺し合いになる。相手を仕方がないと放任するのでは、横暴がいよいよ盛んになる。相手もよくないが、それをよくすることの出来ぬ自分も駄目な人間である、ただここで、狂人に病識がないように、駄目な凡夫はその自覚が出来ない。仏の仰せを信じて、煩惱具足の駄目な凡夫と知らせて頂くだけである。太子の仰言る「共に是れ凡夫のみ」の仰せも、仏智に照らされての述べ懐である。

ここに相手を責めるだけでなく、自分の虚仮なる凡夫の解決を求めねばならぬが、憲法二条に「夫れ三宝によりまづらば何を以てか枉(まが)れるを直うせん」と、仏の眞実の大悲心に浴して、救いの光の射しをめることを教えられる。

唯仏是真

法然上人は、父君の横死を縁として、その遺言により

「恨みは恨みによりて消えず、恨みは恨みなきによりてのみ消ゆ」の教えによって、父の仇への恨み心を消そうとつとめられたけれど、遂にその不可能の壁につきあたり、そのどうすることも出来ない煩惱具足の身にさしのべられた大悲の至極、選択本願の念仏を頂かれて、恨み合う者が共に救われる無碍の白道を獲られたのであった。そこに、熊谷直実も、また熊谷に殺された教盛の子も、同一念仏におさめられたのであった。

このことよって太子のお心を推すのに、無尽の煩惱を持たれた太子は、馬子の横暴に対してまたしてもおこる苦悩を、善悪の凡夫を憐愍される絶対の仏心に立ちかえらせられ、立ちかえらせられて、唯仏のみこれ眞実なりとの述懐があったと思う。

親鸞聖人はまた「ただ念仏のみぞまことにておわします」と随喜されたのである。煩惱熾盛の凡夫にとって、なくてはならぬ、他の何ものにもかえがたい道が、お念仏ばかりである。

世間に立派な教は無数にあるが、それにはついて行けない私である。高嶺の月で指をくわえて眺めるだけであるが、この一切の教の及び難い身に、向うから差し伸べられた救いの御手が「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」であった。

火と水の河にさえられて、進むことも、とどまることも、はたしりぞくことも出来ぬ身に、西岸上から喚びかけられる声が「一心正念にして直ちに來れ、我能く汝を護らん、すべて水火の二河に隨することをおそれされ」である。

直來の來の一字は、來れともよめるが、來るともよむことが出来る。私のところにすぐ来て下さる久遠のみ親にひかれて、親の國に帰ることが出来るのである。

以上の太子の御体験から「篤く三宝をうやまえ」と憲法に高く掲げられて、そこから自然にやわらぎの道もひらけ、凡夫の道も直うされるとお示し下さったのである。

ただ念仏のみぞまこと

度々御紹介しているが、池山榮吉先生のこの世での最後の言葉は、友子夫人が

何も残るものはない、何も残るものはない

ただ念仏だけが残ってくれる、

ただ念仏だけが残ってくれる

偉いこったよ、有り難いこったよ

と、先生のお口元に耳をよせて、ときれ／＼ながら聞きとって下さったのであった。

そのすこし前に、御自身に死を自覚された時、末娘の愛



子さんに、

愛子、お父さんさえ居れば満足だったね。今度という今度は生きてやれなくなつた。御前の本当の味方はお念仏だけだ。一緒に念仏しよう

と云われた。愛子さんは、今お念仏を云わなければお父様と永久に離れてしまわなければならぬと思つて、必死の思いで南無阿弥陀仏とお父様について云われました。すると先生は、

愛子もう思い残すことはない、これで安心だ。お父さんは喜ぶよ、お母さんも、亡くなつたお母さんもね

とにこにこ微笑んで愛子さんの顔をなでられ、お父さんともう離れることはない。これからは念仏を味わってゆけばいいんだと、加えられた。

先生の絶筆は、

南無阿弥陀仏 アイユ

書きとつておくと

南無阿弥陀仏を言え

と愛子さんに告げられたのであつた。

友子夫人には、

しっかり念仏するんだ、しっかり念仏するんだ、どこまでも念仏でつながっているんだよ、

## いのちの初夜

北条 民雄

民雄氏は大正三年生れ、十九才でハンセン氏病になり、死を度々はかりながら死ぬことも出来ず、二十一才で東京の全生園に入院、深刻な小説を書き川端康成氏の懇篤な指導をうけていたが、病があらたまり二十四才死去。いのちの初夜は彼の私小説である。

○ 一生懸命に治療してみようと決心した全生園であるが、入院した当夜、自分より重い沢山の患者を見るにつけ、再び死を決心して病室を出て、枝ぶりのよい木を探したが、どうしても死にきれないで、病室に帰つた。その時のその病室の同じ病を持った当番さんから、次の様に云われた。「君は死にたくて出たのだから。それを知っていたが止める気はない。ここは自殺しようとしても出来ない者が入る所なんだよ。」

死を選んでも、再び立ちあがれるものを内に蓄えている人はそれを失敗するね。意志の強い者には絶望も大きいから死を決心すると安心する心と、心がドキドキする矛盾の中にひそむものは何か。

どこまで行つても人生にはきつと抜け道があるとおも

いいか南無阿弥陀仏

であり、他の御子様方には

父さんはもう今度は大だ、ああ可哀そうに、念仏をしておくれ

とくり返された。

瞑目して、先生の御心事を思いますのに、期せずして、聖徳太子と親鸞聖人のお言葉通り、世間虚仮、唯仏是真、と、ただ念仏のみぞまことにておわします、の御体現であつた。南無阿弥陀仏。

最後に、先生の常々仰言つた念仏は、「追えども去らぬ煩惱の持主の私に、招かざれどもつきについて、離れようとなしな念仏である。ここに私は袖を捕えて離さぬという撰取不捨の利益、我れ能く汝を護らんとする御約束の効を体感した」であり、更に加えて「ただ念仏、とは源であると同時に海である。お念仏がぼっかりと念頭に浮かぶ。そのまま如来廻向の念仏、行者のためには非行非善の念仏で、信的生活の始終を貫ぬく不壊の生命である」と述べられている。弥陀廻向の御名をいただかれ、念仏も申され候という自然の念仏裡に、有縁の者にお勧め下さつた御一生であつた。

う、自分のいのちに謙虚になろう。

同情ほど愛情から遠いものはないね、僕が一体何を慰め得ようか。

新しい出発をしよう、それにはまず病に成りきることだ。死を望んでも死にきれないという事実の前に屈伏したね。然しまだこの病に屈伏出来ない、早く屈伏して、ハンセン氏病者の目を持つことだ。それは真剣勝負で、果し合いと闘した。

こうしてすっかりこの病者の生活を獲得する時、再び人間として生きかえる、新しい人間がきずきあげられるもし病が進んで盲目になればなつたでまたきつと生きる道はあるはずだ。然し苦悩は死ぬまでつきまとうてくるだろう」

以上が彼の病者としての目、同時にそれは人間としての目が開ける大きな機縁であつた。現在では治療が出来るようになったが、当時は、この病は死に連がるものであつた、これを受け取ることとは死を受けとることである。そこから「天命を知つて人事をつくす」道が開ける。それは真剣勝負である。

某禅師の「生きながら死人となりてなりはてて思いのままにする業ぞよき」とあるが、この難関は、仏ましまして自然にひらけるのである。



あとがき

歳末になりました。慈光誌もいつのまにか三十巻に移ろうとしています。諸先生はじめ、法友皆様の護念の程を十方に向って謝しまつるばかりであります。

山村暮鳥の詩に

糸はひとすじ

ただ、ひとすじについてゆくのみよ

針のあとから

そのゆくほうへとついてゆくのみよ

とある。御名のひかりにみちびかれて、これからのいのちの限り、行くべきを思い頂くことなしに、ひとすじにたどらせて頂くばかりであります。

さて十二月は近角先生の御忌月、大平洋戦争の始まる直前に、浄土にかえられました。今月は幸に福島政雄先生の「近角先生の御一生」の御遺稿を、福島農婦奥様から頂きましたので、貴い記念として慈光に掲載させてもらいました。謹んで御礼申し上げます。

木村無相さんは、心筋硬塞で大発作があり、十月末に、武生市府中の林病院に入院、加療中ではありますが、今日も無事、今日も無事とおたよりを度々頂いております。

まいるべき浄土のありて秋晴るるの一句を、病中作として送って来られました。私は最近法然上人の御歌

南無阿弥陀仏と十声称えてまどろまん、  
ながき眠りになりもこそせむ

を居室に掲げ、念仏のお催促を頂いております。

本年を省みますと、誌友の十余人もお亡くなりになり、又大病で療養生活の方々も多くなりました。これ皆、浮かれ勝ちの私に、きびしいお教えを御身にかけてお伝え頂いております。水の味の著者、高原憲先生のお歌に

あすありと知るよしもなき我なれば今日  
一日を生き抜かんとおもふ

とありますが、多くの難病者を受け持たれて懇切に導かれた国手のお生涯でありました。

△御案内▽

- (一月一日は休講)
- 毎月第一、二、三日曜、午後一時半、一道会例会。
- 市バス、新郊通り一丁目下車。東入る三筋目左入る。
- 地下鉄、新瑞橋下車。近鉄呼続下車。又は本笠寺下車、市バス乗りつき。
- 毎月二十四日、午前午後。
- 昭和区小椋町、教西寺法話会。
- 市バス御器所通り下車、又は北山下車。
- 毎月七日午后、「日曜には変更」
- 尾西市三条板倉、蓮光寺修道会。
- 新一宮よりバス、尾張三条下車。

定価 半年 七〇〇円(送共)  
 一年 一四〇〇円(送共)

名古屋市南区駄上町二ノ八八  
 編集・発行人 花田 正夫  
 電話八二一〇七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷  
 印刷人 坂部 光雄

名古屋市南区駄上町二ノ八八  
 発行所 慈光社  
 振替口座 名古屋 一〇四七番  
 郵便番号 四四七